

豊能町「道の駅」基本構想



曲がりくねって来た人に、
「おかえり」と言える場所に。

住んでいる人も、観光客も。

大阪北部の農村、豊能町

この業務を通し、この地に魅了された僕は、衝動的に移住、先日ついに豊能町住民になった。

大阪の中心部から車で走ること約40分、曲がりくねった道路の先には棚田・川・入母屋造の屋根、原風景とも言える農村地帯が広がっている。

ここは豊能町、人口2万人弱の小さなまち。ブランドメッセージは、「曲がりくねって、ただいま。」

昨年、僕は「道の駅」事業の始まりである、構想づくりに携わった。

観光の拠点、生活の拠点

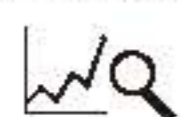
「道の駅」は、単なる休憩施設でなく、単なる商業施設でもなく、地域課題を解決する手段だ。豊能町「道の駅」は、外から来た人にはまちの魅力で時間を過せる場として、町内の人には暮らしの質を高める場としてあるべき、つまり観光ゲートウェイ機能を持つ「小さな拠点」だ。若い人を呼びこみながらも、高齢になっても住み続けられるまちづくりのコアとして機能してほしいと考えた。

業務の流れ



河津憲嗣
地域活性化計画担当

まちを分析する



現場、データ、ときには歴史からまちの状況を把握し、課題を洗い出す。

候補地を探す



場所はあるか、どういう強みがあるかなどいろいろな条件を立てて、比較していく。

コンセプトを考える



一番大切な業務工程。なぜ「道の駅」が必要なのか、そしてそこで何を成し遂げたいのか。

施設と規模を決める



まちの課題解決のためにどんな機能が必要か、どのくらいの大きさかを検討する。

費用と工程を把握する



完成させるにはどのくらい予算がいるのか、どのくらい時間がかかるのかを予測する。

新名神高速道路が開通し、ますます便利になる豊能町。このチャンスを活かすには、通過していく人達に滞在してもらう仕掛けが必要だ。

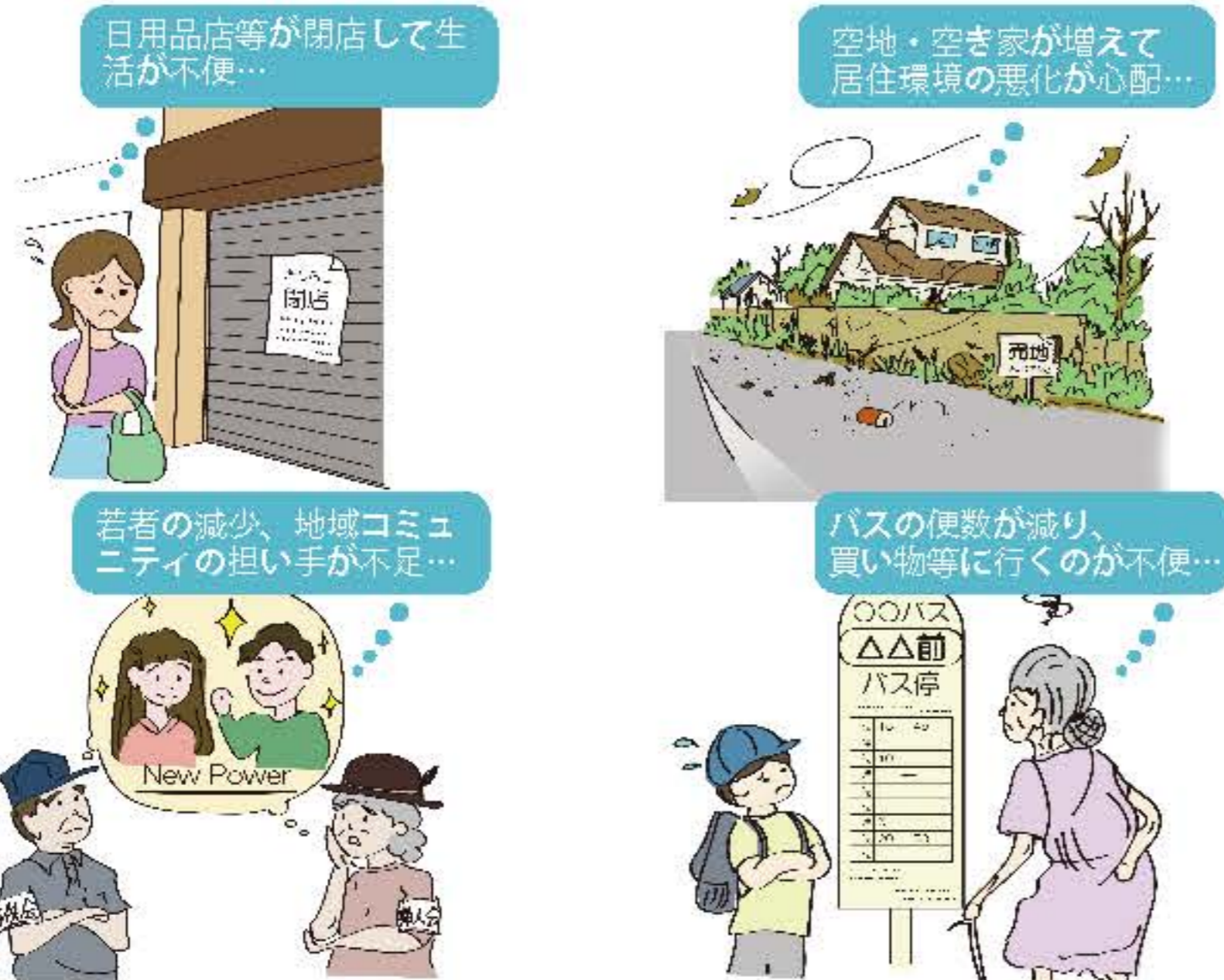
通過地からの脱却

日本全国で問題となっている「少子高齢化」「担い手不足」は、豊能町でも深刻な問題となっている。人がいない、あるいは人のバランスが崩れて生まれるまちの問題は、農業を筆頭に生業の維持にも波及している。ただ、まちの中心を通る国道423号は、車が通るだけでなく、サイクリスト・バイクライダーのメッカになっており、実際、豊能町には「来ている」。

徳島市立地適正化計画策定業務

将来想定される課題

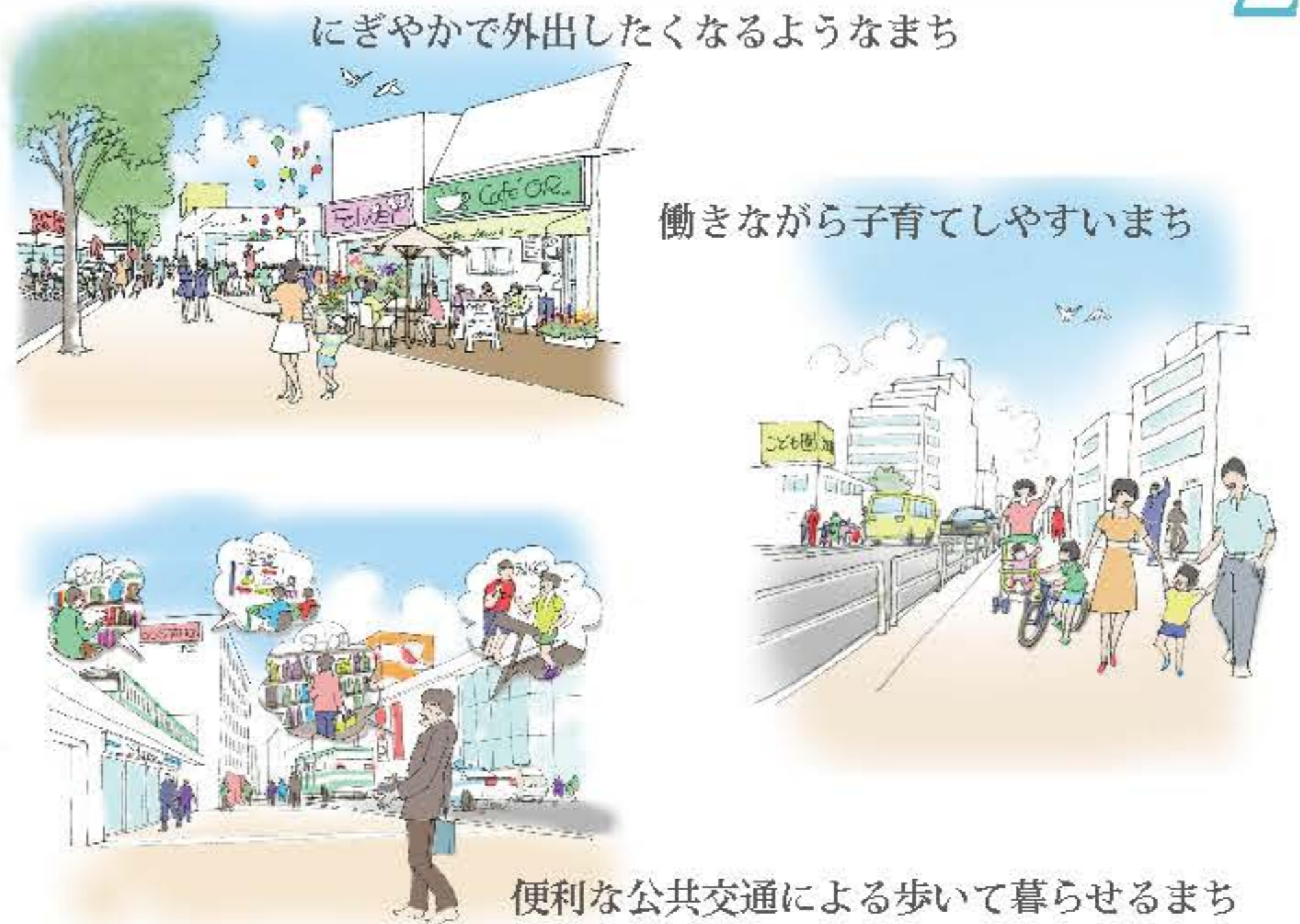
人口減少や高齢化が進むと…



1

課題解決型のまちづくりのストーリー

2



目指すべき都市の骨格構造

特徴を持った拠点と公共交通で結ばれた集約型都市構造を構築
(コンパクトシティ+ネットワーク)

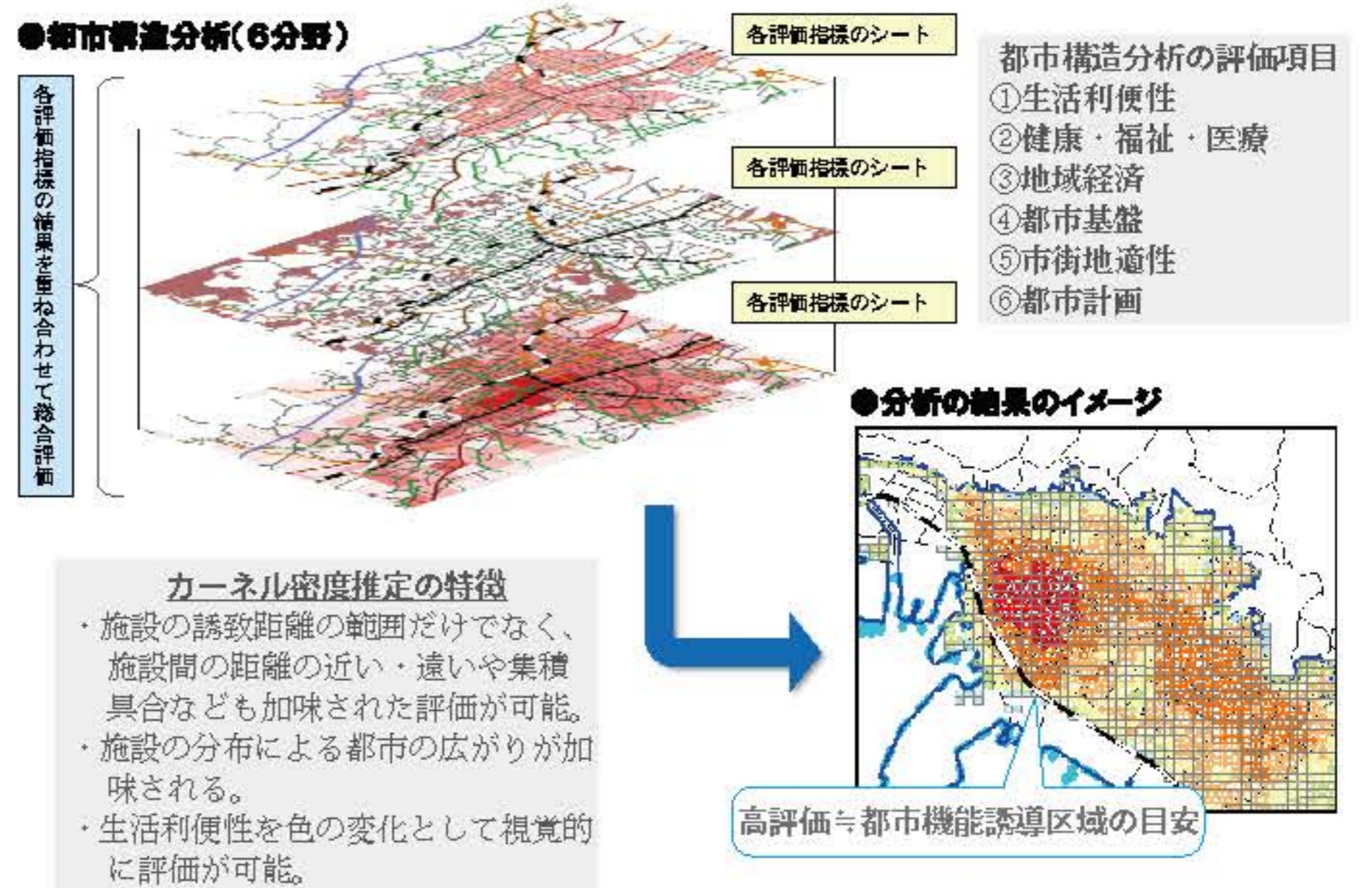
3



誘導区域

都市構造評価の一例 『カーネル密度推定』

4



集約型都市構造を形成するためには、住民が利便性の高い公共交通（鉄道や路線バス等）によって、病院やスーパーマーケットといった生活サービス施設が利用できるなど、日常生活に必要なサービス機能が身近に存在するまちづくりの検討が必要である。

そのため、鉄道駅に近い業務・商業が集積するエリア、中心部から離れているものの都市機能が一定程度充実している地域を選定し、利便性の高い公共交通でネットワークが構築されるような都市構造を検討した。

都市の骨格構造

誘導区域

多くの地方都市においては、急速に人口が減少しており、拡大した市街地のまま人口減少が進行すれば、一定の人口集積により支えられてきた医療や商業施設等の維持が困難となることが想定される。

こうした中、都市全体の構造を見直し、都市をコンパクト化するため、2016年（平成28年）に都市再生特別措置法の中に立地適正化計画が位置づけられた。

立地適正化計画を作成にあたり重要なポイントは、誰にどのような行動変化（ライフスタイル）を期待するのかということである。対象とするターゲット層や目的が明確化されたストーリーの構築が重要である。

まちづくりの方針と施策への取り組みにより、都市が抱える課題が解決されることで、理想とする都市像の共有と実現に向けた行動が求められる。

立地適正化計画の背景

課題解決型まちづくり

持続可能なまちへの成熟



森本 理雄
コンパクトシティ担当

市街地には、都市インフラや各種施設などの整備が行われ、これらが生活利便性を形成している。誘導区域の検討にあたり、「都市構造の評価に関するハンドブック（国土交通省都市局）」の評価指標を基本として、利便性の高い地域を都市構造評価分析により評価した。生活利便性を点数で評価し、色の変化として視覚的に把握できることが分析の特徴である。得点が高いエリアを目安として、公共交通の利便性等を加味して誘導区域を検討した。

前橋市中央児童遊園「るなばあく」



レトロ遊園地で地域活性化

るなばあくの再生

前橋市の中心部に位置する前橋市中央児童遊園。ここは「るなばあく」との愛称で知られる市営遊園地です。1954年に開園したこの施設は、広さが約9000㎡ほどで、敷地内には自動車や汽車、飛行機などのレトロな遊具がならんでいます。

オリエンタルコンサルタツの100%出資子会社のオリエンタル群馬では、2015年4月より同施設の指定管理を行っています。テレビをはじめとするメディアに取り上げられる機会が増え、2017年度は年間利用者数延べ171万人を超え、昭和の開園以来、最高記録を更新しました。

前橋産へのこだわり

指定管理を開始してまず第一弾として取り組んだのは、コンテナを活用した施設整備です。敷地内の未利用空間を活用し、来園者が自由に使うことのできる屋内施設を整備しました。

そして、コンテナの一部を活用し、二次化カフェ事業として、2015年12月よりカフェ「EOM」をオープンしました。地元産にこだわり、親も子どもも手軽に安心して食べられる「おむすび」を主力商品として販売しています。

今後は、地域の生産者と協働し、稲作にも挑戦予定です。事業を垂直統合し、完全な二次化を図ることで採算性の向上も視野に入れています。



もくば館の電動木馬



焼きたての鳥山海苔店の海苔でむすんだ「おむすび」



近藤真紀
観光振興担当

ADDRESS

前橋市中央児童公園 るなばあく
群馬県前橋市大手町
営業時間／09:30～17:30
※11月～2月は09:30～16:30
休園日／火曜日
入園料／無料



あしがり郷「瀬戸屋敷」 × 「瀬戸酒造店」



地域再生・ブランド力向上へ

総合的マネジメントへ

オリエンタルコンサルタンツでは2017年4月より、開成町の重要文化財であり、300年の歴史を持つ古民家「瀬戸屋敷」の指定管理事業を開始いたしました。これと併せて隣接する「瀬戸酒造店」の再生事業に着手し、2018年3月に瀬戸酒造店の蔵開きを迎えました。

「瀬戸酒造店」の日本酒

開成町の美しい自然や豊かな資源、伝統文化である醸造技術を駆使した日本酒で、飲んだ人を楽しく幸せにしたい。「このような想いのもと、瀬戸酒造店では酒造りに取り組んでいます。

自家醸造するのは代表銘柄「酒田錦」、新商品の「セトイチ」「あしがり郷 月の歌」です。月の歌は、開成町の町花でもあるあじさいの花から抽出した酵母を使用しています。白ワインのような爽やかな味わいとなっており、女性でも楽しめます。



酒田錦 (左)、セトイチ (中央)
あしがり郷 月の歌 (右)



カフェスペース「Cafe hacco」

地域活動の拠点として

神奈川県開成町では、江戸時代の名主であった瀬戸家の古民家を「みんなの我が家」をコンセプトに整備し、町直営で運営維持管理を行ってまいりました。2016年に指定管理制度を導入することを受けて、弊社は指定管理者の募集に応募し、運営維持管理を行う運びとなりました。瀬戸屋敷では各種イベントが開催されている他、コワーキングスペースとしての貸出も行っています。また、2017年には「カフェハッコ」がオープンし、飲食のみならず、地域の方との協働の場として様々な取り組みがなされています。

今後の取り組み

今後も引き続き、開成町の「あしがり郷 瀬戸屋敷」と「瀬戸酒造店」を拠点に、地域の飲食店や住民の方々と協働し、地域ブランドをつくることで、開成町の更なる地域活性化に取り組んでいきます。



近藤真紀
観光振興担当

ADDRESS

あしがり郷 瀬戸屋敷
神奈川県足柄郡開成町金井島1336
開園時間 / 10:00 ~ 19:00
休園日 / 月曜日、年末年始



瀬戸酒造店
神奈川県足柄郡開成町17
営業時間 / 10:00 ~ 19:00
定休日 / 月~水 (祝日は営業)

